

住信為替ニュース

THE SUMITOMO TRUST & BANKING CO., LTD FX NEWS

第1625号 2002年02月18日(月)

《 Bush in Tokyo 》

ブッシュ米大統領が来日した。昨年の10月に予定されていたものの、同時多発テロで延びていたのがようやく実現したものだ。前任のクリントンは後であわてて来日して修復を図ったものの、最初は東京に寄らずに北京を中心に中国に一週間以上居て、そしてそのまま帰ってしまうというアジア訪問を行ったが、それとは大きな違い。東京にまず寄って二日泊まり、そしてソウル、そして北京に行く。国として親しい順からの北東アジア諸国歴訪である。

ブッシュ・アジア歴訪の目的はいくつかある。

1. 将来、超大国になることが確実な中国首脳陣との意見交換を行い、軍備の拡散防止や対アフガン戦争以降の西南アジアの秩序維持に関して一定の枠組みを作り出すこと。対イスラム勢力の布陣で協力の可能性を探ること。また、江沢民以降に出てくる次世代の中国指導者と交友関係を作り、その変化の行方を見定めること
2. 訪問先各国と北朝鮮に対する姿勢に関して意見交換を行い、特に韓国の金大中大統領とは太陽政策の今後の展開に関して具体的な前提条件を話し合うこと。また、北朝鮮の出方に関していくつかのシナリオを設定して、それぞれのケースに関する対応策を考えておくこと
3. 依然として北東アジアにおいてアメリカの最も信頼できる同盟国であり経済力も豊かな日本との関係を促進し、将来中国が巨大化することが確実な中で、現在の北東アジアでのアメリカ中心の安全保障体制が揺るぎのないものにする方策を探ること。この中では、経済力でアジア諸国に対して影響力を保持し続ける「日本」がどうしても必要であり、そうした観点から日本経済の活力再生を図ること

となるでしょう。日本ではブッシュ政権の対日関心の強さに関して「アメリカは日本経済のメルトダウンでアメリカ経済が煽りをくらうことを懸念している」という意見が強いが、それがもし経済面だけの発想から来ているとしたら、大きな間違いである。

不良債権問題にしる、デフレ問題にしる、その深刻化によって日本の経済力が落ちて、それが日本の北東アジアにおけるスタンディングの低下に繋がる。そうなれば、アメリカにとって不可思議で基本的考え方が相容れない中国の台頭を意味するという意味で、ブッシュ政権にとって懸念すべき事態なのである。安全保障上の観点極めて重要だ。

現在のブッシュ政権の中国に対する考え方は2000年12月01日に現在ホワイトハウスのローレンス・リンゼー経済問題担当補佐官が行った演説に明確に出ている。彼は日本と中国に触れながらこのとき以下のように述べていた。

=====

1. 過去8年間の民主党政権の対日政策は間違っていた。クリントンは先の中国訪問において同国には9日間も滞在したのに、日本に立ち寄りことなくアメリカに帰ってきた。過去50年間アジア・太平洋地区の平和と繁栄の要となっていたアメリカと日本との関係は民主党の「日本無視」政策によって毀損した。21世紀にはこんな贅沢は許されない。米日関係においては貿易や安全保障問題の細部については意見の相違があるかもしれないが、この二カ国の緊密な協調関係に取って代わる関係は他にない。

2. この米日の二カ国関係改善は他の諸国、特に中国を排除するものではない。しかし、そのためには中国が太平洋にまたがる平和と繁栄の地域圏諸国のクラブに加盟し、中国が国内政策の歩調をこのクラブが広く採用している所有権、自由、司法の独立の枠組みに合わせなければならない。中国の機嫌をとるためや、同国引き込みのためにアメリカと日本の緊密な関係を基盤とする太平洋周辺諸国クラブの理想と原則が犠牲になるべきではない。

3. ここで議論すべきは対中政策ではなく、日本とアメリカの今後の関係であり、次のアメリカの政権が日本との関係において直面する課題である。この地球で最も規模が大きい二つの国民経済の関係はとてつもなく重要なのだが、今回の米大統領選挙では取り上げられなかった。議論がなされなかったということは、ブッシュ、ゴアの両方の陣営に食い違いがなかったということではない。実際の所、アメリカのアジア全般、特に日本に対する両陣営の立場の食い違いは他の問題と同じくらい目立っていた。

=====

この(2)を見れば、ブッシュ政権の対中国観は明確である。アフガニスタンでの戦争行為に支持を与えたことからこうした対中国観は多少変化しているかも知れないが、共和党政権にとって中国は依然として相容れない体質を持った、潜在的に脅威溢れる国なのである。法治、自由尊重のアメリカの国是にはほど遠いからだ。

一方の中国は、江沢民国家主席専用の飛行機に盗聴器が付けられていた問題で何一つ

アメリカに苦言を呈することなく、表面上はアメリカ主導の秩序に乗る姿勢を見せている。それは今の段階ではそうした方が、北京オリンピックも控えた中国にとって好都合だからであって、もともと中華思想が根強い国にあって「アメリカの考え方が国家統治、世界秩序の維持に最適」だとは思っていないでしょう。この2カ国はロシアが経済的にも影響力を落としたあとの世界の二大勢力でありつづけると考えた方が良い。それは地勢面でも、人口の面でもそうだ。経済力はまだ著しく違うが、一方は伸び盛りである。

《 a best friend in Asia 》

そうした中でアメリカが日本を見る目は、「頼りにしたい最大の友」というものだろう。体制も似ているし、何よりもアメリカの手の外に飛び出て冒険を犯しそうには見えない。その割には湾岸戦争戦費のかなりの部分を出せるほど経済力は豊かであり、その経済力をもってして、アジア全体に強い影響力を持っている。対テロの戦いでも、イギリスに次いで強い支持を表明している。

仮に日本が大幅に国力を落としたアジアを想定するなら、出てくる勢力は中国である。これは間違いない。韓国でも、マレーシアでも、フィリピンでもない。中国だ。アメリカが懸念するのはそうした「中国が影響力を増したアジア」である。そうした中では、日本がいつまでアメリカの友人でいてくれるのか、例えいてくれても日本の価値がどの程度アメリカにとって有用かは不明である。

中国が影響力を増したアジアでは、アメリカの権益がどのように守られるかは全く予測が付かない。日本という影響力があり、そのバックにアメリカがいるからこそ、アジアにおけるアメリカの権益は守られていると考えられる。だからアメリカにとっては、「日本の経済力」、アジアに影響を及ぼせる経済力は「安全保障上の問題」、「national security matter」なのである。

そこまで考えれば、ブッシュの訪日課題として挙げられるいくつかの問題が全部リンクしていることが分かる。アメリカにとってのアジアにおける安全保障の問題とは、すなわち日本経済の再生を阻害しているもの（不良債権、デフレなど）の除去を敢行し、日本経済を再びアジアにおいて中国の影響力を阻止できるほどに蘇らせることである。ブッシュはその為に来る。

ブッシュ政権にとって悩ましいのは

「(民主党政権下の)アメリカの対日要求は手厳しいばかりでなく、混乱を招くものだった。(中略)ある国の当局者は、別の国の当局者と金融・財政政策を討議すべきだろうか。無論である。しかしこの二国間の会話は物静かに、そして国内政治メリットの観点からではなく経済原則を貫徹させる形で行われなければならない」(ローレンス・リンゼー)

であるにしても、小泉政権がアメリカにとっての関心事項を実行する力があるのか、それを助けるためにはアメリカはどうした態度を取ったら良いのか分からなくなってきている、ということだろう。

ブッシュ政権成立からほぼ1年数ヶ月の時間の経過にもかかわらず、日本政府の経済混乱收拾の手法は少しも冴えを見せない。こうした中で、「日本経済は既に恐れるに足らず」(ニューヨーク・タイムズ)、「日本経済はもう時間切れ」(フォーブス)のような見方が跋扈している。これはアメリカにとっても由々しき問題である。

リンゼーは2000年の暮れの時点の姿勢を崩していない。日本が資本さえもってきってくれるなら、円安も許容しようと言う姿勢である。そして物静かに日本の再生を待つというもの。しかしブッシュ政権の中には、「日本に任せて今のまま静かにしてはダメだ」と考える人々も台頭してきている。オニール財務長官などがその急先鋒だと言われる。

産業界出身の身としては、自動車業界などを中心に「円安批判」が強まっていることも気がかりだ。「このまま見ていると日本は何もしない。圧力を使うべきだ」という意見は、ブッシュ政権の中にも出ているでしょう。ブッシュは今回の訪日で、「どちらの選ぶか」という問題も検討するだろう。

1988年に水木楊が書いた本に「日本再占領」というのがある。「日本を経済封鎖、完全占領するホワイトハウスの極秘プロジェクト“チェリー計画”」を巡る小説だが、今のアメリカは正にそういう気分だろう。つまり、GHQよろしく日本を再占領して再生し、それからまた日本に返したいという気分。危機への対処を知らず、指導者をうまく育てられない日本は、危なっかしくて見ていられないに違いない。日本という国は、誠に指導者を作ることが下手だ。しかし「下手」で済む話ではない。

ブッシュ大統領は大きなアジア政策のシナリオの中で、アメリカにとっても重要になった日本経済の再生の為に、小泉政権への具体的な提言をいくつか用意してくるだろう。ただしリンゼー・ドクトリンによれば、それは表面化しない可能性が高い。マーケットとしてはその辺をどう読むかが鍵となる。

〈 simplistic 〉

もっともブッシュ政権、アメリカの外交政策全体で見れば、今は「危ない賭」に出ようとしているといっても過言ではない。その賭を誘っているのは、アフガニスタンでの電撃的な勝利だ。この勝利を受けて、ブッシュは今年の念頭教書で先週も取り上げたように「悪の枢軸」として三カ国を名指しした。しかしこの賭は、アフガンでの戦争開始以上にアメリカにとって遙かに危険で、勝ってもアメリカの孤立を招く危険性を秘めている。

欧州の高官達の発言がブッシュの欧州における孤立を象徴している。今の時期は、ブ

ブッシュは欧州に行くよりも、アジアに居る方が遙かに居心地が良い。フランスのベドリヌ外相は、このブッシュの世界観を「simplistic」(過度に割り切った、単純化した)と表現したし、パッテン EU 委員会委員(対外関係担当)は「absolutist」(絶対主義者、絶対王政主義者)と表現した。

「悪の枢軸」の三カ国のうち、ブッシュ政権はイラクに対して本気で軍事攻撃の可能性を探っているようである。先週のパウエル国務長官の議会証言を見ても、アメリカがイラクのフセイン政権をとりわけ敵視し、その転覆を真剣に準備していることは明らかである。手段の中には、軍事行動が含まれる。政権の中で一番慎重派とされるパウエル長官も、政権の中での影響力保持のため、大統領方針に従う姿勢だ。

アメリカに危険な賭の誘惑に駆られているのは、ハイテクを駆使したアフガニスタンで短期間に勝利したからだ。その勝利は、「同盟国をも驚愕させるに十分なもの」(英フィナンシャル・タイムズ)だった。核のみならず、通常兵器をハイテクでシステム化した力は他国を寄せ付けない。月に人間を送る努力、IT 革命で先行した実績を軍備に適用した成果が、タリバンの昼間しか使えない対空ミサイル(スティンガー)などものの数ではなくした。

アメリカはアフガンで自信を持った。しかし一方で、「いつまた攻撃されるか」と不安だ。再び攻撃されて笑い物になるのも嫌だ、という気持ちもある。この際「根絶やしにしよう」と悪の枢軸発言が出た。エンロン問題で緩みだした政権の基盤も気がかりだし、国民の関心を外に向けておけるメリットもある。

しかし、今のアメリカの世界観をそのまま現実に当てはめ、それを世界的に実現しようとしたら、巨額の支出と世界に対する容赦なき強制力が必要だ。反感を買うだろう。だから、友達が欲しい。日本はその有力な友達候補だ。「アメリカの行動は、同盟国から支持されると期待する」とチェイニー副大統領は述べているが、同時に彼は「必要なら単独でも決断する」とも述べている。ここが問題で、友達は欲しいが誰もなってくれないなら自分でやると言っている。単独行動主義者のレッテルもアメリカには用意されている。

常識的に考えても、イラクの現フセイン政権転覆を認めることは、アメリカによる各国の体制選択・強制システムにゴーサインを出すことになる。欧大陸の連中が懸念しているのはそうした事態だ。確かにアメリカはどの国をも凌駕する超大国になった。しかし、その独走が世界の国々を不安にさせる。フセイン政権転覆が成功し、アメリカが「次のイラク政権樹立」に関与したら、世界は「アメリカの体制選択の強要」と見るだろう。それは恐怖以外のなにものでもない。

パッテンは言う。「アメリカが先導し、他の先進国がそれに協力する形が良い」と。対アフガンはそうだった。しかし、対イラクではアメリカはこの図式を壊そうとしている。そのとき世界は、新たに二つに割れるかもしれない。世界は裸の王様の超大国を抱くことになる。そういう危うさを抱えた中でのブッシュのアジア歴訪でもある。

今週の主な予定は以下の通りです。

- 2月18日(月) 12月景気動向指数改定値(14:00)
日米首脳会談(東京)
米国株式市場休場(President's Day)
- 2月19日(火) 米ブッシュ大統領国会演説
住宅金融公庫基準金利引下げ
米1月住宅着工(22:30)
米ブッシュ大統領訪韓・訪中(~22日)
- 2月20日(水) 政府が医療制度改革関連法案を国会提出
衆院予算委員会でNGO問題に関する集中審議
米半導体製造装置BBレシオ(7:00)
米1月消費者物価・実質賃金(22:30)
- 2月21日(木) 12月産業活動指数(8:50)
1月貿易収支(8:50)
榊原元財務官講演(12:00~日本外国特派員協会)
米12月貿易収支(22:30)
ECB理事会
米1月コンファレンスボード景気先行指数
米2月フィラデルフィア連銀指数(22日2:00)
米1月財政収支(22日4:00)
- 2月22日(金) マイクロソフト「Xbox」発売

《 have a nice week 》

寒さが徐々に和らいで、そろそろ花粉症の季節になりそうですね。今年は飛ぶ花粉の数もかなり多いようで、花粉症の人には厳しい季節と言うことです。私は今年も「紫蘇ジュース」を作って、必要に応じて飲む予定です。

今週も土曜日から日曜日にかけては諏訪に行っていたのですが、週末のハイライトはそれではなく、「EZ!TV」(フジテレビ日曜午後10時30分から)の後のレインボーブリッジの上での1時間に及ぶトラップでしょうか。午前1時前に番組が終わって直ぐにフジテレビを出たのです。いつもの通りにレインボーブリッジ経由で帰途に付いた。しかし、橋に乗って50メートルもしないうちに渋滞。100メートルちょっと先での大きな事故が原因。渋滞している間にお台場のランプが閉鎖されて、完全に動けなくなった。車に閉じこめられて、その後一センチも動かない。

この間に、車を両サイドに動かして救急車は通る、レッカー車は通るで大騒ぎ。寒いから外には出ませんが。しかし、気持ちが悪いのはあの高い橋の上ですから、揺

れるのです。車ごと。

長くなりそうなので、「こうなったらしゃあない…」ということで、諦めてPCを取り出して、電池が持つまでと思ってこのニュースレターなどを書いていた次第。「どこでもオフィス」です。ははは、ですから皆さんがここまで読んできた文章のかなりの部分は、レインボーブリッジの上で書かれている。結局一時間全く動かずに、車が動いたのは午前2時10分でした。事故は車三台だと思った。迷惑な話です。

それでは皆さんには良い一週間を。

《当「ニュース」は、住信基礎研究所主席研究員の伊藤（ 03-5410-7657 E-mail ycaster@gol.com ）が作成したものです。許可なき複製、転送、引用はご遠慮下さい。また内容は表記日時に作成された当面の分析・見通しで一つの見方を示したものであり、売買を推奨するものではありません。最終的な判断は、御自身で下されますようお願い申し上げます》